

●教育のひろば		
◇厚みのある教育	石川忠久……	3
●連載／教育一語		
◇⑬学ぶ喜びは、己の熟するところにある		
◇⑭性相近きなり、習相遠きなり	新宮弘識……	6
●特集 Lesson on		
◇若い道徳の先生へ	立川修司……	8
◇道徳で磨く表現力	江藤幸恵……	12
◇地域資料から学ぶ「人のつながり 心のつながり」	広見理恵……	16
●連載 体験を生かして		
◇道徳資料をきっかけに、自分たちの町のよさを見直す	松田憲子……	20
●連載 人間関係づくりの演習と道徳		
◇「クラスがまとまる 支え合う」人間関係づくりを	土田雄一……	21
●連載 授業参観におすすめの道徳授業		
◇低学年は『生命尊重』で感動を!!	竹井秀文……	22
●連載 ひと味違った授業をするために		
◇板書の工夫	加藤宣行……	26

「マイハート」は休載です。ご了承ください。  
本文中の勤務校は平成23年12月現在のものです。

**新宮弘識先生**▶小学1年の孫娘が、論語・徒然草・唐詩・学問のすすめ等の古典のさわりの部分を、意味が分からないままに暗記しはじめた。朝の会で発表するらしい。みんなで暗誦していると気持ちがよいと言っている。大切な教育が行われているように思われる。

**立川修司先生**▶バスケットボール観戦の魅力は、なんと言ってもそのスピード感と技の多彩さにあります。最近では、プロバスケのみならず、大学バスケも観戦に行くようになりました。野球の華がホームランなら、バスケの華はダンクシュートです。爽快ですよ。

**江藤幸恵先生**▶4年間の幼稚園生活を終えて、小学校へ復帰しました。9月に加藤宣行先生にきていただき、道徳研修会を開催。授業を見た先生たちの道徳の授業が変わってきました。よいと思ったことをすぐやってみる若い先生方の行動力に驚かされました。

**広見理恵先生**▶4月より、長年勤務した小松市を離れ、加賀市に勤めることになりました。「地域」が変わっても決して変わらぬものと、柔軟に変えていくもの。新しい出会いに感謝する日々です。

**松田憲子先生**▶近くに見事な桜並木があります。その中に数本冬桜があり、今年もちらほら花を咲かせていました。小春日和の中、そこがひととき温かく感じられたのは気のせいでしょうか。さっそく写真におさめました。

**竹井秀文先生**▶附属に勤めて10年。道徳も本腰を入れて7年目。まだまだ自分の色が出せる授業ができずに苦しんでいます。苦しみながらも、道徳の魅力に益々とりつかれています。子どもたちに助けられながら、精進したいと思っています。

**加藤宣行先生**▶先日、韓国の公立小学校で授業をしてきました。文化も歴史も違う場所で、道徳の授業ができるのかどうか、不安もありましたが、やってみたいという気持ちの方が勝りました。やってみたら、同じ子ども、同じ人間でした。当たり前のことですけれど。

# 厚みのある教育

史跡湯島聖堂  
公益財団法人斯文会理事長 石川忠久先生

取材日：平成24年2月10日

## 学府「昌平黌」

湯島聖堂はかつて「昌平黌」と言いました。「昌平」は孔子が生まれた土地の名です。周辺の「昌平橋」「昌平坂」といった名前の由来にもなっています。

「昌平黌」は1690年（元禄3年）五代将軍徳川綱吉公が、上野にあった大学頭を務める林家の学問所を、湯島へ移したことから始まります。その後、幕府ができて200年ほど経ち、武士のモラルがゆるんできました。それを引き締めようと1797年（寛政9年）、老中筆頭の白河藩主・松平定信によって「寛政の改革」が行なわれました。

このころに活躍したのが、柴野栗山・尾藤二洲・古賀精里の「寛政三博士」です。かれらは、全て江戸の出身ではありません。柴野栗山は香川、尾藤二洲は愛媛、古賀精里は佐賀の人です。

「昌平黌」は幕臣に限らず、地方出身者や身分の低い下士にも開かれた学問所で、全国から秀才たちが集まってきました。ここで勉強してそれぞれの国に帰り、学んだことを還元します。幕府でも、地方の藩校の中から優れた人物の情報が得られれば、すぐに抜擢しました。身分制度の厳しい時代でしたが、寛政のころにはそれもだいぶ崩れてきていて、「昌平黌」は身分を問わない学問の場でした。

低い身分だった人の中では、下士出身の太田蜀山人（南畝：狂歌や洒落本で有名）がいました。蜀山人は試験で1等をとっています。褒美をもらい、その後は取り立てられて出世しています。

庶民の代表は、山田方谷。方谷は高梁（岡山県）の人で農民出身でした。才能を認められ、殿様に抜擢されて、庶民から家老になり、藩の財政を立て直しています。方谷の4歳のころの書を見たことがあります。大きな書でそれは立派なものです。数えでの4歳ですから今なら3歳ですよ。

## 「昌平黌」の時代の教育

寛政のころは「昌平黌」に倣い多くの藩校ができます。柳川の伝習館、庄内鶴岡の致道館など、全国三百諸侯がこぞって藩校を作りました。1万石の小大名でも自分の領地に学校を作っています。藩校は現在でも高校の名前などに残っていますね。

また、藩校だけでなく塾や寺子屋など多くの教育の場がありました。当時の日本は津々浦々に教育機関をもち、世界と比べても高い教育水準を達成していました。非常に教育が進んでおり、町民・農民にまで教育が届いていたのです。当時の江戸は人口100万人の大都市でしたが、識字率は80%とされています。これはパリやロンドンといった世界の大都市よりもはるかに高い数字です。「高札」に書かれているお触れを、民衆のほとんどが読むことのできる社会だったのです。これらの教育の仕組みが根っこにあったこと、それが明治以降の学制の普及にも当然影響を与えたのです。



東京の都心に、江戸の面影を漂わせる「湯島聖堂」（遠景）。厳かな雰囲気である。【聖橋より撮影】

## 厚みのある教育

しかし、江戸時代の300年近い太平の中で積み上げ、幅広く培ってきた「教育の厚み」が、明治になり、「富国強兵」政策のもと、「役に立つもの」を尊ぶ考え方によって変質してきたのです。学問も「役に立つか、役に立たないか」ということに判断基準が置かれていくようになってしまいました。つまり、「役に立たないもの」は切り捨てられ、顧みられなくなったのです。

「役に立つもの」として教える内容が決められていく中、教育もこれらを一方的に教える「押しつける教育」となっています。押しつけられると人は反発してしまいます。これでは“学ぶ喜び”など身に着くはずはありません。

江戸時代の価値観は「役に立つもの」を第一とはしていませんでした。作る喜び、極める喜びを第一に考え、知恵や技を磨いてきました。一見無駄なものでも一生懸命に創り、発展させていたのです。庶民の知恵が息づいた時代です。

一例を挙げれば、浮世絵がそうです。根付もそうです。どちらも「役に立つもの」ではありません。ですが、浮世絵も根付もその優れた技の魅力を感じて、海外にまで多くの収集家があります。明治になって「役に立たないもの」が捨てられる中、外国の人がこれらを次々に買い集めています。江戸の人々は、心を豊かにし、生活を豊かにするものとして芝居を愛好し、浮世絵や根付を大切にしながら、それらを世界に誇るものへと育てていったのです。

日本人は江戸時代に培ってきた厚みのある精神



大成殿。大成は孔子廟の正殿の名称。孔子像のほか、孟子・顔子・曾子・子思の四賢人が祀られている。

を、自分自身で捨ててしまったのです。そうなる社会も殺伐となってきます。やがてそれがエスカレートし、是非善悪が見えなくなり、戦争を引き起こし、挙句の果てに敗戦いう取り返しのつかないこととなってしまいました。

外国の人々の中にも小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）のように、日本にほれこんでくれる人がいました。最近ではドナルド・キーンさんでしょう。彼らが惹かれるもの、世界が惹かれるもの、そういうものが日本にはまだあるのだと、日本人自身が気づかなければならないのでしょうか。

それでも、今年の東日本大震災では、世界中が不思議がりほめてくれたように、暴動や略奪のようなことはまったく起こらず、人々は非常に整然としていました。ここに、江戸時代の「教育の厚み」が、まだ根づいていたのだなという気持ちになりました。

## 関係を広げる～道徳心～

道徳心は自分の身近なところ、家族の単位から広げていけばよいと思います。家庭から、外へ出て社会へ、国家へという広がりです。

まず、親孝行の「孝」があり、これが基本となります。「孝」は老いた親を背負うことを表す文字で、これは親への敬愛の念を表します。そして、目上の人への「弟（悌）」。「弟」は年長者への尊敬の心です。

『論語』に「入りてはすなわち孝、出でてはすなわち弟」とあります。家庭の秩序から社会の秩序、そうやって広げていくことが大事なのです。

人間社会は一人で生きていくものではありませんから、必ず人間と人間とのやり取りがあります。そこでは、人に対する思いやりが大切になってきます。会津の藩校・日新館の教えでは、社会秩序をたいへん重んじています。「うそをつくな」「道草を食うな」など、「ならぬことはなりませぬ」と厳しく今の世の中でも通用することを教えています。

「郷党意識」という考えもあります。郷党、つまり地域社会には、その地域の長老がいます。また、世代ごとに、青年会のような組織がありました。上の世代から若い者まで、縦にも横にも関係が繋がっているのです。そのつながりの中で、世代から世代へと受け継いでいく意識が生まれ、

その意識が社会性や伝統文化を身につけさせていくのです。

### 文化は不滅

孔子は「人類の文化は不滅」だという考え方を持っています。世界の四大文明の中でも、中国文明だけは文化を成熟させながら流れつづけていき、決して途絶えさせていません。悪いものは捨て、良いものは加えながら、よりよいものへとし



孔子像

ていくのです。そのように受け継いでいくのですから「文化は不滅」なのです。

文化を受け継いでいくため、古人は命をかけても、正しい歴史を伝えようとしています。

春秋時代のお話ですが、ある国の王が大臣に殺されました。しかし、実際に手を下したのは、大臣の配下で大臣本人ではありません。

ですが、歴史官は客観的にとらえて、大臣が殺したように書いたため、その歴史官は大臣に殺されました。すると、その弟が兄と同じように事実を記します。この弟がまた殺されてしまいました。3番目の弟がまた同じことをします。そして、やはり殺されてしまう。するとさらに、4番目の弟が出てきて事実を曲げずに記します。ここで、大臣はさすがに「もう負けた」と思い折れました。4人の兄弟の、事実（歴史）を正しく受け継ぐという、命をかけた使命感が、そこにはありました。

### 漢文のすすめ

中国の古典（漢文）は先人の知恵がいっぱい詰まっています。ところが、やはり、明治になると、古くさい、役に立たないものとして顧みられなくなっていきました。

しかし、漢文は学ばなくてもよいものなのでしょうか。一つの例を挙げましょう。ノーベル賞を日本で最初に得た湯川秀樹さんは、幼いころおじいさんに漢文の素読を教わり、それが肥やしとなって、研究が深められたと述懐しています。物理と漢文

は関係ないように思われますが、幅広い素養となるものが漢文にはあるのです。漢文を身につけていくと、教養に厚みや深みが出てきます。これが「厚みのある教育」の大切なところなのです。

漢文には道徳的なものだけではなく、唐詩もあれば小説もあります。面白いものがいっぱいある。詩も声に出して朗詩すれば自然に入ってきますし、興味もわいてくる。まず、そういうものから入っていけば漢文が好きになるでしょう。もっと漢文と親しんでもらいたいですね。

### 「文質彬彬」

『論語』の中に「文質彬彬」という言葉があります。あえて言うなら何事もバランスよく、という意味の言葉です。「文」は、彩（あや）・飾り、「質」は生地や素材のことです。「彬彬」は、あきらかである、はっきりしているということです。「文」が勝ると「史」となり、「質」が過ぎると「野」になる。「史」は事務的にごたごたすること、「野」は「雅」の反意語で粗野なことです。

茶碗で例えると、釉薬や模様が「文」で泥の生地が「質」です。「文」は泥の生地がなければ描けませんし、「質」は彩模様がなければただの泥です。バランスが取れてお互いに繕り合っているものが一番美しいのです。

「文質彬彬」、頭だけ、体だけを鍛えるということではなく、両々相まって偏らずにやっていってほしいと思います。（談）



石川先生直筆

# 学ぶ喜びは、己の熟するところにある

—何のために学校で学ぶかについて教育しよう—

淑徳大学名誉教授

本誌99号で、「何のために学校で学ぶか」についてしっかり教育することが重要であると述べたが、このことに関して、知人から詳細に述べてほしいという要望があったのでそれに応えたい。

ある学校の校長先生は朝礼で「何のために学校で学ぶか」について「お父さんやお母さんや先生にほめて欲しいから」「将来のために」「知的好奇心」の三つのことを話し、各自考えるようにという課題を示されたという。

このような重要な課題を示すことは、極めて大切なことであるが、要はその内容であろう。

「お父さんやお母さんや先生にほめて欲しいから」とする目的意識は、学びの主体は己にあるという学びの本質からみれば他律的であるともいえる。しかし、低学年の場合は、このような目的意識が刺激となって子どもの学びを促進することがあり、一方的に否定することはできない。

「将来のために」という目的意識は、子どもに将来がみえるのかという意味を含めて漠然としておりとらえようがない。「将来のために」をよい大学にはいる、よい会社に入るという進学の方角を意味したものであるとすれば、学びの本質からみて疑問がある。しかし、前者と同様に学びを促進するという意味で一概に否定できない。

最後は、「知的好奇心」を満たすという目的意識である。「知的好奇心」は、自分の不完全性を自覚し高みに向かって求めて学ぶという学びの本質からみて納得できる。

ここで、標題の「学ぶ喜びは、己が熟するところにある」について考えてみよう。これは、朱子の言葉であるが、「己が熟する」に注目しよう。何をもって己が熟すると考えるかであるが、その本意は、自分が人間として熟していくことである

う。

国語や算数を基幹教科であるとする研究会がある。基幹とは、何かの体系の中心になることをいうが、国語や算数は教育という体系の中心であろうか。進学のための基幹であるとするなら理解できないことはないが、教育の基幹ということになれば、それは人間づくりでなければならない。国語や算数を通して人間になっていくことが学びの目的ではないかと思う。知的好奇心から生まれた単なる物知りでは困る。

大江健三郎が「なぜ、子供は学校に行かねばならないか」について書いた文がある。ご子息光君が小学生の頃について書かれた文である。「光にとって、音楽が、自分の心の中にある深く豊かなものを確かめ、他の人につたえ、自分が社会につながっていくための、一番役に立つものです。(中略)国語だけじゃなく、理科も算数も、体操も、自分をしっかり理解し、他の人とつながっていくためのものです」(『自分の木』の下で「朝日新聞社/『週刊朝日』初出/一部執筆要約)

このように人間として熟していくことこそ教育の目的ではないだろうか。このことは、教育基本法の教育の目的に「人格の完成」を掲げていることでも明白である。

従って、前述した三つの目的は、人づくりという教育の最終目的を目指して、発達段階に応じて段階的に指導する必要があるろうし、このように構造的・段階的に学びの目的をとらえて教育する必要があるろう。

そのためには、道徳の時間はもちろん、朝礼、朝の活動、総合的な学習の時間等で、学びの目的について話し合わせたり、教師の考えを示して子どもに問いかけたりしたいものである。

# 性相近きなり，習相遠きなり

—人間のよさに満ちた教育的環境をつくろう—

新宮 弘識

「性相近きなり，習相遠きなり」は、『論語』陽貨17にみえる言葉である。

「生まれながらの心としての先天的なもの（性）には大きな個人差はないが，学習によって育てられた後天的なものは，学習のありようによって大きな開きが生じる」という意味である。

性格・体型・風貌・運動能力等は確かに先天的な影響を受ける比率が大である。そういう点からすれば、「性，相遠し」であり，生まれながらのものによって人間の一生が左右されるという運命論に陥ることになる。しかし，特に確かな知識や技術・豊かな心・健やかな身体・問題解決的な力等の21世紀の教育目的である生きる力は，後天的なものの比率が大であり，「習，相遠し」という教育環境論になる。

芥川龍之介の『闇中間答』につぎのような趣旨の問答がある。何者かが「お前がこの世でしてきたことの責任は誰がとるのか」と僕に尋ねる。僕は次のように応える。「4分の1は遺伝，4分の1は環境（境遇），4分の1は偶然，僕の責任は残りの4分の1だ」という文である。

芥川が環境と偶然をカウントしたことは注目であるが，「孟母三遷の教え」のように教育的環境が人間づくりに多大の影響を与えることを改めて認識するのである。

教育的環境といっても，物的環境や人的環境があるが，人的環境の中でも，教師や親の子どもに与える影響力は大きい。

若い教師は，子どもの教育を自分一人で背負い込んだつもりで，肩に力を入れて子どもに接しがちである。それが尊い。若い教師はそうありたいと思う。教師がまっすぐに子どもと向き合っているならば，子どももそれに応えようとする。このよう

なひたむきな教師の生き方は，子どもに人間的な影響を与えないはずはない。若い教師が盆栽のように整っているようでは，魅力はない。

しかし，教育経験と研究を積み重ねてくると，芥川の「僕の責任は4分の1」ではないが，我々教師にできることは，子どもの教育のほんの局部にしかすぎないことに気づかされる。いい意味で教師の力や学校教育の限界を感じるようになってくる。自分の教育を大局的に鳥瞰できるようになってくるのである。そうなれば，謙虚になり，子どものために他者の力を借りたいと思うようになる。学校長や同僚教師の力はもちろんのこと，地域の人々や親の力も借りたいと思うようになる。そうなれば，子どもを取り巻く人的環境は充実する。

特に人づくりの中心になる道德教育では，教師や保護者や地域の人々の生き方こそ大切である。

これらの人々は不完全ではあるが，自分の可能性に向かってよく生きようと思って日々精一杯生きている。また，他者や集団や社会との関係の中で支え合って生きようとしている。そのような大人の生き方が子どもの人間的成長を促す人的環境になる。

しかし，大人のこのような生き方は，子どもにしっかりとみえてはいないのではないか。その生き方を子どもに語り聞かせることが大切であろうと思う。教師は親の生き方を，親は教師の生き方を，父親は母親の生き方を母親は父親の生き方を子どもに語るのである。

現代は他者の問題点を論う傾向が強い。親は教師を教師は親を，父は母を，母は父をとお互いの欠点を論うようでは，一番の被害者は子どもであることを銘記すべきであろう。

孟母三遷の教え—孟子の母親が子どもの教育のために，住居を三回も転居して子どもの教育に資したという話である。（古列女伝）

# 若い道徳の先生へ

## ～子どもと共に成長する道徳授業をめざして～

福岡県北九州市立枝光小学校校長 立川 修司

### 1 古くて新しい悩み

(5月の風が心地よい日のことです。とある町の喫茶店で……。ベテランの先生と若い先生方の会話です。)

◎新年度が始まり1ヶ月あまりが経ちましたね。今日、こうしてコーヒーを飲みながら話するのも久しぶりですね。どうですか、授業の悩みなどないですか。

A先生：私は道徳の授業で悩んでいます。先輩の先生方から、「あなたの道徳は、国語の授業の様ですね。」と言われ、自分でも国語と変わらない授業しかできていないなあって思うんです。

B先生：そうね。私も道徳の副読本を資料にして道徳の授業をしています。終わったあとにこれでよかったのかしらと思ってしまいます。

C先生：僕もいわゆる中心発問までは、指導書を参考にしながら進めることができるけど、その後、終末はどうしたらよいのか迷うことがしばしばです。

◎皆さんの悩みは本当によく分かります。今も昔も若い先生方に共通する悩みそうですね。よい機会だから、道徳の授業をどうしたらよいのか、少し一緒に考えてみましょう。

### 2 内容項目をどうとらえるか

(空はだんだん雲が厚くなってきました。)

◎道徳の授業をどう展開するかを話す前に、皆さんは内容項目(道徳的価値)をどのように分析していますか？

A先生：学習指導要領の解説や指導書に目を通しています。

C先生：僕も同じ。

B先生：でも、時間が無くてゆっくり読めないことも多いです。(苦笑)

◎週に一時間だけの道徳授業ですから大切にしてもらいたいけど、なかなか時間がとれないですね。でも、授業を構想する前の価値分析の時に心がけてもらいたいことがあります。

それは、まず自分自身を内容項目に照らして振り返ってみてほしいということです。

道徳の内容項目にある道徳的価値は、実行することはとても難しいことです。教師が自分を振り返ることで、自分のことを棚上げて、子どもたちに一方的に道徳的価値を押しつけるといったことはなくなると思いますよ。

A先生：でも、私は子どもたちに「よりよく生きたい」と思って欲しいです。

C先生：だからといって、価値を押しつけるのは道徳じゃないし……。

◎道徳の時間の先生の役割は、教科学習のように「何かを教える人」ではなくて、子どもと「ともに考え悩む人」になると考えたらどうですか。率直に言って、「人はいかに生きるべきか。」と考える時、子どもも大人も同じ土俵に立っていると思うんです。だったら先生も一人の人間として、子どもと同じ立場で共に考えたり悩んだりしながら、時に子どもが考えをまとめる手助けをするのが教師の役割ではないでしょうか。

### 3 授業の「ねらい」の立て方について

(窓ガラスの向こうに、ぽつぽつと雨粒が見え始めました。)

B先生：そう考えると、道徳の授業と国語の違いが分かりそうだけど、まだぴんと来ないですね。

A先生：登場人物の心情を考える学習活動は国語も道徳も同じだし……。

◎国語には国語のねらいがあるように、道徳の授業には道徳のねらいがあるよね。

B先生：最近、私は思いやり・親切の内容項目を「周りの人に温かい心で接しようとする心情を育てる。」というねらいで授業しました。

◎そうですか。確かに、ねらいの内容は、「……の心情を育てる。」とある授業が多いですね。(微笑)

ところで、道徳性は、道徳的判断力・道徳的心情・道徳的实践意欲と態度からなると習ったよね。

C先生：はい、もちろんです。

◎分かりやすくするために、私は(道徳的判断力=心のハンドル)(道徳的心情=心のガソリン)(道徳的实践意欲と態度=心のアクセル)と言い換えて説明する時があるんだけど。

A先生：分かりやすいかも。(笑)

◎そこで、道徳の授業で、資料中の登場人物の心情や行いを通して、子どもの心のハンドルの方向を導くのか、心のガソリンを増やすのか、子どもがアクセルを踏んで実践への意欲を高めるのか、つまり、授業のねらいがどこにあるのか、教師はしっかり押さえておかないといけないよって事です。

C先生：ハンドル、ガソリン、アクセルですね。(三人とも頷く)

◎そうなってくると、ねらいの内容も道徳的判断力(ハンドル)・道徳的心情(ガソリン)・道徳的实践意欲と態度(アクセル)の三点から、考えるべきだと思いませんか。

B先生：そうですね。この次、指導案を考える時に気を付けたいと思います。

#### 4 話し合い活動について

(四人とも道徳授業の話に夢中になってきました。)

◎ところで、道徳の時間の主な学習活動は、話し合い活動ですが、どうですか？

A先生：はい。とっても困っています。(笑)  
授業の反省会の時、あなたの授業は、「一問一答、一板書になっています。」って指摘されて、とっても恥ずかしかった

です。

C先生：僕の授業も、その通りだなあ。子どもが意見を言って、それを板書して、はい次の人……みたいな授業になってます。

◎教科学習の時間の話し合いは、例えば、算数では計算の仕方を見つけるための話し合いをするように、何らかの結論を導き出すために話し合いを行うけど、道徳の時間は、結論を求めるといふより、子ども同士がそれぞれの意見や考えを交わらせることに重きが置かれているようです。

B先生：だったら、一問一答は全然ダメですよ。(A先生C先生も頷く)

◎さらに付け加えると、話し合い活動後、予め学習指導案に書いておいた予定調和的結論で終末をまとめてしまうと、道徳的価値の押しつけと大して変わらない授業と言わざるを得ないでしょうね。

A先生：思い当たることばかりで、落ち込むわ。

◎まあ、そんなに落ち込まないで聞いてください。手短かに言うと、話し合い活動は、子どもたちが道徳的価値の自覚を深めるためにする学習活動だと言えます。

道徳的価値の自覚とは、

- ①価値理解：道徳的価値は大切であること。
- ②人間理解：道徳的価値は大切ではあるが実現は難しいこと。
- ③他者理解：道徳的価値の実現に向けては多様な感じ方・考え方があること。
- ④自己理解：価値理解、人間理解、他者理解を自分とのかかわりで行い、今の自分を

と考えていでしょう。

だから、発問構成もこの視点で見ると、何を問い、何を話し合うか分かりやすくなると思います。

C先生：全然分かりやすくないですよ……。 (苦笑)

◎そうですか？ そうですね。(納得)もう少し話を具体的にしていきたいと思います。

#### 5 授業展開について

(気がつくと雨脚が強くなっています。)

◎あなた方はもう何度か道徳の授業案を書かれ

たと思いますが、どのような展開で書きましたか？

A先生：導入、展開前段、展開後段、終末の四段階です。

B先生C先生：私もです。

◎基本形だね。(笑) 道德の授業案のほとんどは四段階になっているとってよいかもありません。今の皆さんは、まずはこの四段階で授業の構想力を高めていってよいでしょう。四段階の展開に沿って、発問や学習活動を工夫しながら経験を積んでいきましょう。でも、四段階が道德の展開の唯一の方法ではありません。私は、四段階による道德の授業が固定化、マンネリ化、硬直化を招いているとも思っています。今は多様な道德の授業が求められています。基本形を学んだ後は、どんどん自分なりの工夫に挑戦してください。

B先生：いつまでも基本だけでは進歩がないことがよく分かりました。ところで、とても初歩的なことを聞くようで恥ずかしいのですが、私の道德の授業、特に研究授業の時などいつも時間が足りなくなって、四段階のはずなのに、三段階とか、2.5段階で終わっちゃうんです。何かいい方法はありますか？

◎いい方法ですか……。 (苦笑) 若い先生方には共通の悩みですよ。

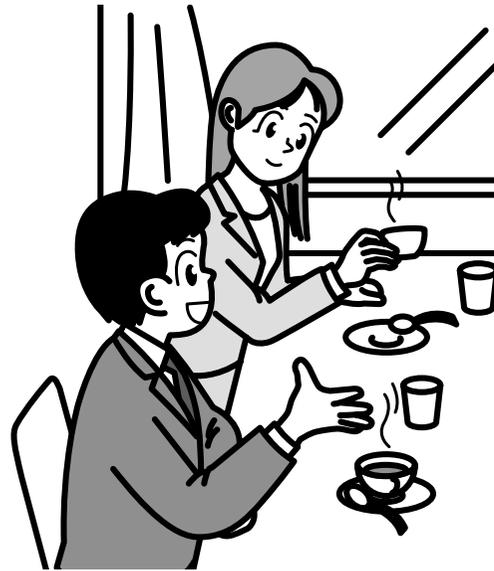
時間が足りない原因は、多くの場合むだが多いケースだと思います。ねらいを達成するために、内容が多くて時間が足りない場合は一主題多時間の授業構成もOKですから、それで解決すると思います。あなた方の悩みは、前者の方だと思います。

むだが多いという言い方は少し失礼かもしれません。丁寧すぎて時間が足りなくなると訂正しましょう。(微笑)

私がこれまで拝見した授業のほとんどが展開前段で資料の文章を丁寧に追い、時間がかかってしまう例が多くありました。道德の発問の中に「中心発問」という用語があることは、知ってますよね。

A先生B先生C先生：もちろんです。

◎でしたら、できるだけ早く「中心発問」に入り、そこに時間をかけてじっくりと子どもた



ちに話し合い活動をさせていただければ、時間も足りなくなることはないし、一問一答にならずに済むと思いますよ。

C先生：そうですね。分かっているつもりなだけで、いざ授業になるとなかなかできないんですよ。(A先生もB先生も頷く)

◎できるだけ早く「中心発問」に入るには授業技術だけでなく、勇気も必要かもしれませんね。(三人とも納得)

B先生：話がここまで進んだら、上手な導入の入り方もお聞きしたいところですが、それだと時間がいくらあっても足りませんから、導入はまたの機会ということで、終末についてお尋ねします。

C先生：僕も終末に困っています。

A先生：結局、四段階全部に困ってるってことじゃない？(笑)

B先生：その通りだけど、みんな困っているんだからお互い様かな。(笑) まじめな話に戻るけど、終末って、教師の説話が多いので私もよく説話をするんだけど、そうそう道德の授業の終末にふさわしい説話や自分の体験があるわけでないし、私の実力不足もあって、お説教くさくなったり、資料の二度与えっばくなったりするんです。だから授業後にこれでよかったのかしらと思ってしまいます。

◎一般に『終末は、ねらいの根底にある道徳的価値に対する考えをまとめたり温めたりして、



今後の発展につなぐ段階である。』と言われて  
います。私なりの考え方を言わせていただく  
としたら、私は、終末は子どもがよりよい自  
分へ向かって歩き出すお手伝いをする段階と  
解釈しています。別の言い方をすれば、より  
よい自分へと歩き出そうとする子どもの背中  
をそっと押してやる段階と言ってもいいかな  
……。

C先生：その表し方、何だかかっこいいですね。  
(笑)

◎ありがとう。(微笑)それで、道徳授業の終  
末段階は、子どもが心の高まりをもとに道徳  
的实践への意欲化を図る活動が必要になる訳  
です。教師の説話もその内の一つです。それ  
以外にも、『心のノート』を使ったり自分の  
気持ちを文や標語にまとめたりと、方法は  
色々あるので、実践事例や先輩方の工夫を調  
べてみてください。大事なことは、子どもた  
ちがよりよい自分に向かって歩き出せるよう  
な終末にしたいということですね。

## 6 オリエンテーションの勧め

(日も暮れて、駅へ向かう人の流れが多くなっ  
てきました。)

◎もう、こんな時間になってしまいました。そ  
ろそろ話を切り上げないといけませんね。最  
後に道徳授業のオリエンテーションの話をさ  
せてください。

A先生：オリエンテーション？

◎そう、オリエンテーションです。(笑)

私は、道徳の授業を見せていただく機会が  
多くあるのですが、最近、気になることとし  
て、子どもたちはどんな心構えで道徳の授業  
に臨んでいるのだろうかという思いを持つこ  
とがしばしばあるのです。どういうことかと  
言うと、子どもたちは一週間に30時間前後の  
授業を受けています。その授業の大半は、教  
科学習で、教師の指導や支援のもと、めあて  
や課題の解決に向けた学習をしています。単  
純に言い切ってしまうと、毎時間、解答を求  
めて学習していることとなります。そうであ  
れば、道徳の時間でも自然と子どもたちの道  
徳学習に対する心構えが、教科学習と同じに  
なるのもやむを得ないと思います。しかし、  
先ほどからくり返しお話してきたように、そ  
れでは道徳の時間の特質をふまえた学習を行  
うことはできません。ですから、子どもたち  
の道徳学習に対する前提となる心構えを明確  
にしておき、生き生きとした道徳授業を行うた  
めに、私は「道徳学習のためのオリエンテー  
ション」を皆さんにお勧めしています。それ  
ぞれの学年の発達段階に応じた言葉で、例え  
ば、「のびのびと自分の思いや意見を言うて  
よい時間」とか、「お話を通してみんなの考  
えを出し合ったり比べ合ったりする時間」と  
か、あるいは「問題の答えを見つけ出す時間  
ではない」とかいった内容で、オリエンテー  
ションを行うことは、道徳の時間の授業を成  
立させる大切な要素となると思うのです。高  
学年であれば、「自分の生き方を考える時間」  
と言ってもよいかも知れませんね。あなた方  
も自分なりの工夫でオリエンテーションに挑  
戦してみてください。

C先生：そうですね。早速実行してみたいと思  
います。

B先生：私も……。今日のお話を聞いて、道徳の  
授業が楽しみになってきました。(笑)

◎そう、それはよかった。あなた方の工夫で、  
子どもたちが道徳の授業を好きになってくれ  
たら、私も嬉しく思います。それでは、また、  
お会いしましょう。

(四人の差した傘は、それぞれの方向に分かれて  
雑踏の中に消えていきました。)

# 道徳で磨く表現力

## ～子どもの感性と表現力を結びつけて～

神奈川県相模原市立中野小学校教頭 江藤 幸恵

### 1. はじめに

生活科で近くの公園に行って「あき見つけ」をしてきた1年生。カードいっぱいドングリや葉っぱ、ニコニコ顔の自分や友だちの顔が、描かれていた。校外学習が子どもたちにとって、楽しく満足できるものであったことがよくわかった。発表タイムには前に出て、堂々と自分の見つけたことをみんなに伝えていた。先生が「カードを前に出してください」と言っても、そばにいた男児は、まだ書ききれていない自分の思いをぎりぎりまで懸命に書いていた。一方、5年生の国語の作文の授業。自習の課題として作文を書くように指示されたが、題名と名前を書いたきり続きが書けない。「何をかけばよいかわからない」そうで、書くヒントを伝えてみるが、相変わらず白い原稿用紙をじっと見つめていた。

この二つの対照的な授業の場面から分かることは、書く前の時間の充実感の違いである。前者は、校外学習で夢中になってドングリやきれいな葉っぱを拾って、充実した時間を過ごした。心を動かすものがあつたから、そのあふれる思いを表現したいと思った。後者は、取り立てて書きたいことはないが、課題だから書かなければならない。「書く」ことがスタートだから、何をかけばよいか思い浮かばず困っている状況であろう。「書く」ことがねらいではない生活科と「書き方」を学ぶ国語の授業である。ねらいも違うので二つを比べることに少し無理はあるが、やはり夢中になって、真剣に向き合った時間があるのとないのとで、その後の授業展開が大きく変わってくることは間違いない。

### 2. 新しい学習指導要領で変わったこと

新学習指導要領の道徳編、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の3に新設された2項目の一つが「(4)表現する機会の充実」である。

自分の考えを基に、書いたり話したりするなどの表現する機会を充実し、自分とは

異なる考えに接する中で、自分の考えを深め、自らの成長を実感できるよう工夫すること。

とある。まず「自分の考えを基に、書いたり話し合ったりするなどの表現する機会を充実する」という部分に注目したい。

私たちは、生活する中で様々なことを考えているが、次から次へ場面が変わっていくので、深く考えることは少ない。まとまっていない考えをより具体的にするために立ち止まる時間が必要である。それが「書く」活動である。頭の中に散らばっている様々な思いを集めて文や絵に表すことは、心の中で自分と対話することである。対話することにより自分の考えを再構築することができる。次に「自分とは異なる考えに接する」ために、友だちの意見を聞いて自分と比べる。この「比べる」作業をすることで、自分の考えが広がり、さらに深まっていくのである。それを実感すれば、子ども自身が自分の成長を実感できるであろう。

しかし、実際の道徳授業の中で、子どもが「自分とは異なる考えに接し、自分の考えを深め、自らの成長を実感する」授業が、どのくらいあるだろうか。自分の経験から考えても、そう簡単にできるものではない。ほとんどの場合、教師が子どもの学ぶ道筋をほぼ決めてしまっている。例えば、発問に対して子どもから出てきそうな意見を短冊に書いて用意しているような授業である。ある教師が、「自分が子どもの頃の道徳の時間は先生が答えて欲しいと思っていることをクイズのように当てる時間だった」と語っていた。もちろんそうでない授業もあると思うが、教師が言わせたい答えを当てるクイズのような授業が多いことも確かである。

はじめから答えが分かっているクイズ形式の授業では、「自分の考えをもつ」ことも、話し合っ「友だちの意見と比べる」ことも意味がない。授業が終わった後も授業の前と子どもの意識は全く変わらない。イメージとしては、子どもは後ろに寄りかかっている授業である。子どもたちが真

剣に考え、自分の思いを様々な方法で表現するには、子どもが前のめりになる道徳授業にする必要がある。

### 3. 前のめりになる授業づくりの条件

子どもが積極的に自分の思いを語りたくなる授業をつくるには、どうしたらよいか。そのために教師が行うべき次の5つの条件がある。

#### (1) 本質に迫る中心発問を考える

登場人物の気持ちを聞く発問では、考えなくてもすぐ答えられる。手がたくさん挙がって一見活発に見えるが、広がらない。考えないと答えられない中心発問を提示することで授業展開が活発になる。

#### (2) 「書く」活動を取り入れ、考える時間を確保する

ただ「書きなさい」では、書くことがわからず無駄な時間を費やしてしまう。テーマをしぼって書かせることで自分の考えが再構築される。

#### (3) 子どもの発言を受け止め、言い換える

子どもの発言は、言葉が足りなくてわかりにくいことがある。言い換えたり、補足したりして、わかり合えるようにする。

#### (4) 子どもの発言を生かす

子どもの発言に対して「どうしてそう思うの?」と聞き返したり、「よくわからないなあ」と問い返したりすると、ほかの子どもが発言を補足したり、説明したり、話に加わってくる。一人の子どもの発言がみんなで考えるきっかけになる。

#### (5) 板書で子どもの思考を整理する

道徳の授業での板書は、国語と同じように右から縦書きで子どもの発言を羅列していくものが多い。しかし最近では、話し合うことを視覚的にとらえられるように図を使うなど、工夫している。例えば心情曲線。黒板に斜めの線を一本書くだけで、登場人物の心の動きを表現することができる。そんな板書をするると、子ども自身が前に出て来て書き足すようになる。板書は教師だけのものでなく、子どもと一緒に作り上げるものになる。

### 4. 実際の授業の例

#### (1) 主題名 「わたしたちの生きる力」

3-(1)

資料 「わたしの ものがたり」

#### (2) ねらい

- ① 生まれてから今までに家族やいろいろな人々に支えられてきたことに気づく。
- ② たつやくんと同じように自分もいろいろな困難や障害を乗り越えて生きる力をもっていることがわかる。
- ③ 「生きる」ことの喜びを実感し、自分の成長や命を大切にしようとする気持ちを育てる。



#### (3) 展開

- ① 赤ちゃんの写真を見せ、今日の授業では、「いのちは、どのように大きくなってきたか」考えることを伝える。
- ② 「わたしの ものがたり」の資料を見て、大きくなるまでにどんな出来事があったか確認する。  
C: ぼくが生まれた時、みんながすごく喜んだ。  
C: 熱を出したり、けがをしたりして、お父さんやお母さんに心配をかけた。  
C: 歩くことができるようになって、みんな喜んだ。  
C: 保育園に行くようになって、友だちがふえた。
- ③ 4人グループになって、10分間話し合う。その後、カードに一人ひとり自分の考えたことを書く。

#### \* 中心発問

今のたつやくんの元気もりもりパワーはどこから生まれたのだろうか?

- C: お母さんから命をもらった。  
C: お父さん、おかあさん、家族が守ってくれたから、だんだん強くなった。  
C: 家族や友だちからパワーをもらって、大きくなった。  
C: 何でも食べたから、いろいろなことに立ち向

かえる体に成長した。

C：たいへんなことをあきらめなかったから、いろいろなことができるようになった。

C：がんばって歩いた。いっぱい遊んだ。がんばったからパワーアップした。

④子どもから出た意見を、黒板の心情曲線に書き込んでいった。数名の子どもは、前に出て黒板に書き込んだ。

⑤元気もりもりパワーの源を書いたカードをたつやくんの絵のまわりにランダムに掲示し、自由に並べ替えさせた。その結果、

★だれかにしてもらったこと

- ・お母さんから命をもらった。
- ・家族や友だちからパワーをもらって、大きくなった。
- ・お父さん、お母さん、家族が守ってくれたから、だんだん強くなった。

★自分でがんばったこと

- ・何でも食べたから、いろいろなことに立ち向かえる体に成長した。
- ・いやなことから逃げないで自分からはじめたから、できるようになった。

子どもたちは、「自分の力」と「まわりの人の力」があることに気づいた。

⑥2年生の児童が書いた授業の感想を紹介する。

- ・かぞくからパワーをもらって、強くなるのちはせいちょうする。
- ・かぞくがみまもっていてくれてうれしかった。だから、わたしのいのちがある。
- ・やりたいことがたくさんある。べんきょうがたのしい。ちからいっぱいあそんだ。あさ、元気におきられた。ごはんがおいしい。みんな、いのちが光っている。
- ・びょうきやけがもあってほくはパワーアップした。ほくもまだまだ強くなるんだなあ。
- ・いのちはだんだん大きくなって、いろいろなけいけんがいのちを大きくするパワーになる。
- ・いやなことがあってもあきらめない。あきらめないと、力が強くなって太くなっていく。
- ・おかあさんが、がんばってかんびょうしてくれたから、今のじぶんがある。いろいろなことをやって学んだから、今の自分がある。かぞくの力と自分の力がある。

(4)道徳は面白い！

この授業は「中心発問をいかにすべきか」を検証するため、自分の学級(1年生)と事情を話して貸してもらった2年生のクラスで実施した。2年生は、名前を知っている子どもが数名いるだけなので、どのような反応があるか不安であった。ところが、中心発問を投げかけてグループで話し合うところから子どもたちは熱心に取り組んだ。ふだんは、板書は担任が書くということだったが、「終わった人は、前に出て書いてくれない」と声をかけると、数名の手が挙がり、その後は写真の通り、担任していたクラスと変わらず、次々と書き足す子どもが現れた。



驚いたのは、授業が終わった後、休み時間だというのに、黒板の前で授業のつづきの話をしている子どもがいたことである。「もう外で遊んできていいよ」と声をかけると、「休み時間より、道徳の方がおもしろい!」と返ってきた。友だちの意見を聞きたい、自分の思いを話したい、もっと書きたい、子どもたちの『表現したい』がいっぱいになった授業であった。「道徳の時間がすきになった。考えることがおもしろかった」「道徳がよくわかりました。またきてください」といった道徳の時間の意識が変わったという感想もあった。

## 5. 道徳授業を変える

4年生の「図書館で」〔4-(1)規則の尊重・公德心〕を扱った授業を見る機会があった。各自が自分の意見をしっかりとつために

ア. 自分で考える(心内対話)

↓

イ. 隣りまたは、近くの友だちとペア学習

↓

ウ. 一斉学習

このような手順を踏み、一人ひとりがしっかりと自分の考えをもって話し合いに参加していた。

\*中心発問

なぜ、注意書きがなくても静かなのだろう

C：本に夢中だから。

C：一人がうるさくすると、みんなもつられてしまう。

C：図書館でしゃべるのは、マナー違反。

T：図書館が注意書きのある学校の図書室より静かなのはなぜだろう。

C：注意書きは、できていないところにある。学校の図書室は、ちゃんとできていない。

C：この図書館にも、はじめは注意書きがあったのだと思う。

T：注意書きがあるのと、ないのとでは、どちらがいい？

C：注意書きがない方がいい。注意書きはないけど、きまりがないわけではない。

C：きまりは、それぞれの頭や心の中にある。

活発に意見が出され、授業のまとめも「きまりを守りましょう」で終わらず、「きまりは、それぞれの頭や心の中にある」から「中野小学校でのきまりの守り方はどのくらいか？」「30%足りない原因はなにか？」と実践につながるところまで深まった話し合いが行われていた。担任教諭に聞いてみると、筑波大学附属小学校の加藤宣行先生の授業を見てから、道徳の授業に対する意識が変わったそうである。本時も板書から授業の展開を考えたということであった。「由紀子さんは、静かな図書館に行って、どう思ったか？」のような気持ちを聞く発問では、このような内容の濃い話し合いにはつながらない。

授業後の児童の感想である。

- ・注意書きが少なくなったら、中野小学校はきまりが守れているのかもしれない。「きまりは頭と心で考える」ということを今から心がけようと思います。
- ・きまりは頭と心で考えられていることをはじめて気がきました。このことが分かれば、学校だけじゃなくいろいろな所で使えると思いました。

「図書館で」という資料から離れ、「きまりは頭と心で考える」がキーワードとなって、それぞれ

の子どもたちの実践意欲として表れている。

子どもが「前のめり」になって授業に参加した理由を分析すると、

①「規則について考えさせたい」という思いをもって中心発問を考えた。

②自分の考えをもって話し合いができるように、きちんと手順を踏んだ。

③教師が子どもの反応に対して適度な問い返しをして、発言のあいまいな部分を明らかにした。

④テーマについて考えられるように板書を工夫した。

⑤これまでの道徳の時間に、何でも言える学級の雰囲気を作ってきた。

以上の5点が挙げられるであろう。

## 6. おわりに

表現力を磨くためには、子どもたちに豊富な体験をさせる必要がある。その体験が元となり、豊かな感情がわき起こり、「自分の思いを表したい」「相手に伝えたい」という意欲が生まれる。その意欲を糧にしてはじめて、生きた表現活動が可能となるわけである。しかし、いくら豊富な体験を積み重ねても、その体験のもつ意味をしっかりと見極めることができなければ、ただの体験ごっこで終わってしまう。

先ほどのクラスの道徳授業を次の時間も参観した。学校の行事を取り上げて、役割と責任について考える授業であったが、同じように子どもたちが自分の言葉で意見を言い合っていた。道徳の授業で真剣に考え、前のめりになるような授業をくり返して行っている子どもたちは、自らの思いを語る言葉をもっている。道徳的観点でもの・ことをみる目が育った子どもたちは、自ずと表現力に磨きがかかる。さらに、道徳授業においてお互いの考えをぶつけ合い、自分を広げ、深めていくことによって、さらに表現力が磨かれる。

年間35時間の道徳授業を、教師が決めた答えを見つけるのではなく、一人ひとりが自分の持ち味を生かし、自分にしかない感性で表現できるような時間にしていくことが我々教師の役割である。「道徳大好きだよ。だって、自分の思ったことをいっぱい言えるから」と言う子を一人でも増やすために、子どもが前のめりになる授業づくりの参考にさせていただいたら幸いである。

# 地域資料から学ぶ「人のつながり 心のつながり」 ～地域資料「よみがえれ 安宅の森」の実践を通して～

石川県加賀市動橋小学校教諭 広見 理恵

## 1. はじめに

前任校で文科省指定研究「文化や伝統を大切に  
する心を育てる道徳授業の充実」を受け、学校ぐ  
るみで実践を行った。地域資料のねらいは「4—  
(7)郷土愛」であり、学習指導要領には「郷土や  
我が国の伝統と文化を大切に、先人の努力を知  
り、郷土や国を愛する心をもつ」とある。この取  
り組みで行った実践を紹介する。

## 2. 地域資料作成にあたって

(1)はじめは「ふるさと」への思い

「子どもたちが自分のふるさとに誇りをもてるよ  
うな授業をしたい……」そうした思いから地域資  
料作りをスタートさせた。実践校である小松市立  
安宅小学校は、「安宅の関」で有名な小松市安宅  
町を中心とした海沿いの町で、その海岸線には多  
くの松林が、防風林として人々の暮らしを海風や  
塩害から守っている。地域の人たちに取材してい  
く中で、その防風林を守る人たちの懸命の努力や  
思いを知ることができた。「子どもたちにこの  
方々を出会わせたい」「この人たちの行動や心  
を知ること、きっと子どもたちは自分のふるさと  
に誇りをもてるに違いない」との思いをもち、  
「安宅の森」を題材にした資料作成に取り組みこ  
とにした。

(2)ゲストティーチャーとの出会い

資料作りの取材の中で出会ったのがKさん、T  
さんのお二人である。Kさんは、半減してしま  
った安宅の防風林を復活させるため、30年以上も  
の間、中心的存在として植樹や育成に携わってき  
た方である。また、Tさんはせっかく植樹した松が、  
ニセアカシヤの繁殖により次々と枯れてしまう危  
機にあたって、15年間たった一人でニセアカシヤ  
の伐採に取り組んだ方である。

このお二人に出会い、その郷土を思う心や誠実

なお人柄に心を打たれた。使命感を持ち、強い意  
志で、長年活動を支えてこられたKさん。ボラン  
ティアで辛い労働に黙々と従事されてきた、謙虚  
で誠実なお人柄のTさん。何とかこの二人の思い  
と人柄と行動を、子供たちに会わせたいという  
願いから、地域資料を作成していった。

作成するにあたって、30年間松の育成に尽力さ  
れてきたKさんを「よみがえれ 安宅の森(前編)」  
として、15年間ニセアカシヤの伐採を続けてこら  
れたTさんを「よみがえれ 安宅の森(後編)」  
として、前後編二時間構成の資料に編成すること  
とした。

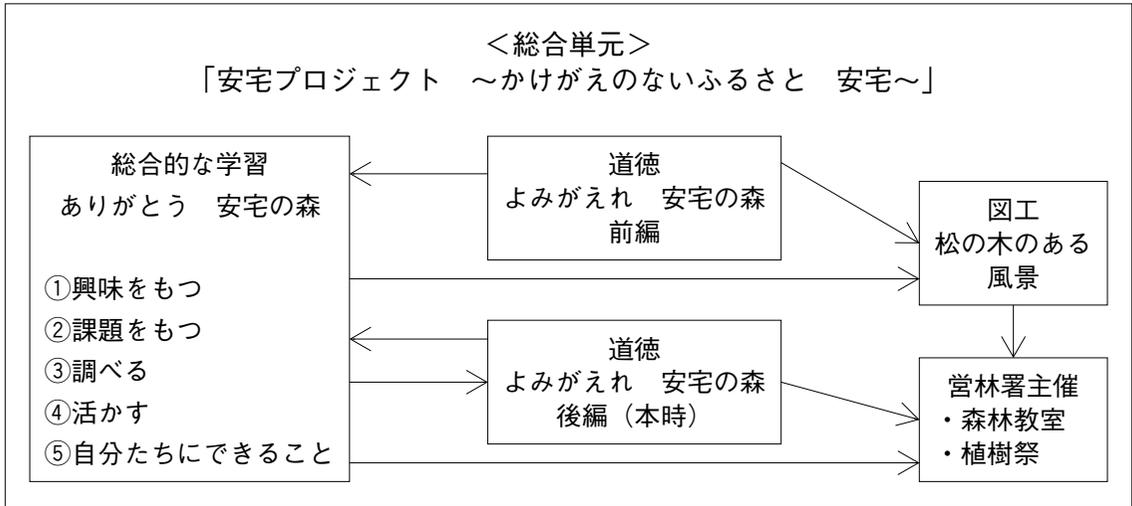
(3)総合単元学習との関連

本授業では、総合単元学習「安宅プロジェクト  
～かけがえのないふるさと 安宅～」を設定し、  
道徳と総合的な学習等をリンクさせた単元構想を  
計画した。

まず道徳「よみがえれ 安宅の森(前編)」を  
総合的な学習の導入として位置付けた。Kさんの  
森に対する熱い思いに気づかせ、かつ安宅の森の  
役割や必要性を問題意識として持たせることで、  
総合的な学習への強い動機付けとなることをねら  
ったものである。

そして道徳「よみがえれ 安宅の森(後編)」は、  
総合的な学習の調べ活動の中盤に設定することに  
した。総合的な学習で、安宅の森について調べた  
知識や体験がベースとなって、より深くねらいと  
する価値に迫れるのではないかと考えたからであ  
る。またこの道徳「よみがえれ 安宅の森(後編)」  
が、次の総合的な学習「自分たちにできること」  
への意欲の高まりにつながることもねらいとした。

このように教科・領域を関連付け、合科的に学  
習活動を設定することで、郷土を守る人の行動や  
思いに気づき、郷土に誇りと愛情を持てる児童を  
育てていきたいと考え、実践を行った。



### 3. 授業の実際

(1)「よみがえれ 安宅の森(前編)」の授業実践  
まず導入として、木が生い茂る現在の安宅の森の写真を見せ、今までの森での体験や、森について感じたことなどを話し合った。その後、木がほとんどない昔の写真を見せると、子どもたちは一様に驚きの声を上げ、不思議がった。そこで「よみがえれ 安宅の森(前編)」の資料を読み聞かせた。

最初に感想を聞くと「こんなことがあったなんて知らなかった」「森の役割を知り、大切なものだと思った」「Kさんの努力で今の森があるんだな」などの感想が出てきた。

次に「植えても植えても枯れていく松を見て、Kさんはどんな思いだったか」を考え、Kさんの心の揺れを話し合った。

そして中心発問「10年後やっとの思いで植樹に成功した時のKさんの気持ち」に話が及ぶと、「うれしさが胸がいっぱい」「これで安宅の森は守られる」「Kさんは森を宝物だと思っている」などの意見が出た。本授業を通して、自分たちが当たり前だと思っていた安宅の森に、こんな歴史があることを知った子どもたちは「安宅の森についてももっともっと調べてみたい」との思いをもったようであった。本時の道徳の授業での学びは、総合的な学習の意欲付けとなったばかりか、その後の課題作りにも生かされていたように思う。

### (2)「よみがえれ 安宅の森(後編)」指導案

- 1, 主題名 安宅の森を守る 4—(7)郷土愛
- 2, 資料名 よみがえれ 安宅の森 自作資料  
(前・後編 本時後編)

### 3, ねらい

- ◎郷土の自然を守るための人々の努力や思いに気づき、郷土を大切にしていこうとする心情を育てる。
- ・郷土の自然を守るために行動した人の生き方に感動する。
- ・ふるさとの森を守るために、どれほどの努力が人々によってなされているかを知り、その人たちの行動の原動力となった「安宅の森を守りたい」という思いがわかる。
- ・安宅の森を守るために自分たちのできることをしようとする意欲を育てる。

### ＜主な学習活動と発問＞

- ①導入
  - ・「よみがえれ 安宅の森(前編)」を想起する。
- ②展開
  - ・感想を話し合おう。
  - ・Tさんにとって辛かったことは何だろう。
  - ・15年もの間、安宅の森を守るための活動を続けてこられたのはどんな思いからか。
- ③終末
  - ・Tさんに伝えたいことはありませんか。

### (3)よみがえれ安宅の森(後編)の授業実践

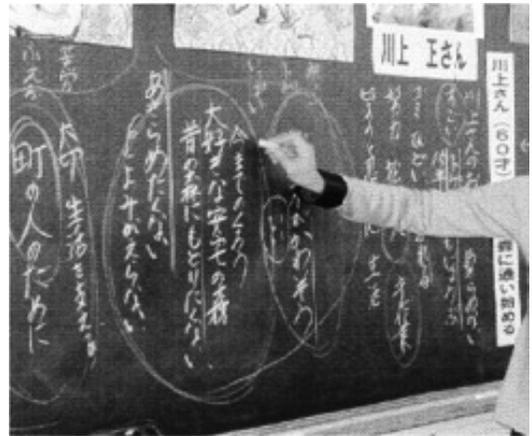
#### ①中心発問の場面

- T Tさんの心の中にどんな気持ちがあったから、15年も通い続けることができたのか。
- C 町の人のためにも、安宅の森を守りたい。
- C このままあきらめたら、松の木が枯れてしまってかわいそう。
- C ここであきらめたら、二度と安宅の森はよみがえらない。
- C 長年ずっと安宅の森に守られてきたから、今助けてやりたい。恩返しみたいなもの。
- C 大好きな安宅の森がよみがえってほしい。
- C ゴミとか見たら松の木も悲しむだろうし、ゴミをなくしたら、松の木がいい気持ちで成長していけるんじゃないかと考えたと思う。
- C ここであきらめたら、今までトゲとかささってもがんばり続けてきたのに、その苦勞が台無しになる。
- C ゴミがあったら、ほかの人がまたゴミを捨てるだろうし、Tさんはそういうことにならないようにゴミを拾ったと思う。
- C ここであきらめたら、30年前の安宅の森に戻ってしまって、またふり出しに戻ってしまう。
- C そうだね。安宅の人たちにとって安宅の森ってどんな森なの？
- C 大切な森。生活を支える森。

中心発問の場面である。この資料で最も子どもたちに考えさせたかった「Tさんの15年間にわたる行動を支えたものとはいったい何か」について話し合った。本授業では、「松の木がかわいそう」「恩返し」「大好きな安宅の森」「町の人たちのためにも」「ここであきらめたら30年前に戻ってしまう」等、子どもたちの発言から、Tさんの行動を突き動かす心情が次々と出てきた。これは、安宅の森について調べた総合的な学習や、道徳「よみがえれ 安宅の森(前編)」を学んでいたことで、子どもたち自身が自分たちの問題として、安宅の森をとらえていたからこそ出てきた発言であると思われる。

事前の資料分析で、Tさんの行動を突き動かす心情を、「自然への思い」「地域の人々への思い」「郷土への思い」ととらえ、これらの心情全てが「ふるさとを愛する心＝郷土愛」であると考えた。

そこで子どもたちの発言を整理して板書し、最後にTさんの行動を突き動かす心情を、キーワードを使ってまとめていった。このことで、子どもたちにとってよりねらいに迫る価値が明確になったと思われる。



#### ②ゲストティーチャーから学ぶ

- T Tさんに伝えたいことはありませんか。
- C 15年間あきらめないでがんばってくれて、ありがとうございます。
- C おかげで安宅の森がきれいになって、安宅の町も安全に暮らせるようになりました。
- C トゲとか刺さって痛かったのに、がんばってくれてありがとう。
- C 15年間も通い続けて下さって、長い間松林を守ってくださってありがとうございます。
- C 安宅の森をよみがえらせてくださってありがとうございます。
- C 15年間も安宅の森のニセアカシヤをきったりゴミを拾ったりしてくれてありがとうございます。
- C 安宅の森を復活させてくれて、ありがとうございます。
- T Tさん、もしよろしければ何か子どもたちに一言お願いします。
- G (ゲストティーチャー)  
私の安宅の森に対する思いはたくさんありますが、歌を一首読みたいと思います。  
「とげかざす ニセアカシヤの根を絶えて  
若松茂る 鎮守の森に」
- C (拍手)

教室が温かな空気に包まれたような気がした。こんなすごいことを成し遂げた方が、目の前にいる。そんなTさんの姿を見ただけで、子どもたちの心の中に感謝の思いが湧きあがってきたように思う。子どもたちの「ありがとう」の言葉は、自分たちの森を守ってくれたからこそ、出てくる言葉であろう。中には深々と頭を下げる子どももいて、見ていて胸が熱くなった。

また、その感謝の言葉を述べる子どもたちに向かって、一人ひとりに誠実に頭を下げられるTさんの姿には胸を打つものがあった。ふりしぼるように語られた短歌一首であるが、子どもたちには充分Tさんの思いが伝わったように思う。何より、Tさんのその誠実な、実直な姿を目の当たりにし、思いを持つことが本時の大きな目的であり、そこから学ぶものこそが、本時の道德の授業の核ではないかと思われる。

ゲストティーチャーのTさんは謙虚な方で、「自分のようなものが晴れがましい場所に出るのははずかしい」と常々おっしゃっていた。そのため、授業でどのようにかかわっていただくか、悩んでいたところ、「ゲストティーチャーの方に語っていただくのではなく、子どもたちから思いを伝えたらどうか」との助言をいただいた。今までゲストティーチャーが関わる授業では、ゲストティーチャーに語っていただくことを前提に考えていた。だが、今回子どもたちから、ゲストティーチャーの方に思いを伝えるというやり方を、初めて行ってみたところ、子どもたちの生の言葉が何ともいえない温かさを醸し出し、余韻をもった終末となった。その資料に応じた流れを柔軟に考えることが、授業を構成していく上で、最も大切なことの一つであると改めて本授業で実感した。



#### 4. まとめ

##### (1) 地域資料を作成・活用するためのポイント

- ・自分で取材し、その人に出会って直接話を伺うことが基本。教師がゲストティーチャーとつながってこそ、いい資料ができ、いい授業ができる。また、ゲストティーチャーの何に教師が心打たれたのかを明確にし、授業を構成する。
- ・資料作成に関しては、子どもたちに何を学ばせたいかというねらいを明確にし、ねらいに迫るための発問を設定して、資料を作成する。また多くの人に、資料を見てもらうことが大切。
- ・ゲストティーチャーは教師ではないので、授業のねらいを明確に伝えておくこと。また、ゲストティーチャーの方に敬意を払い、その方を尊重した関わり方を考えること。
- ・地域資料は、総合的な学習など他教科との関連が図りやすい。総合的な学習で地域を知り、道德で地域につながる人々の思いにふれることで、より深い学びになる。その際、子どもたちの活動の精神的支柱となるのが道德である。

##### (2) 人のつながり 心のつながり

本実践を通して多くの人々と出会った。その出会いを通して児童そして私自身が、地域の人々の行動やその心情にふれることで、人としての生き方を学ぶことができた。

確かに、地域資料の開発には、多くの時間と労力を要する。しかしそれを補って余りある学びと、ふるさとを愛する心を、地域の方々とのつながりの中から得ることができた実感している。

本授業の途中で、Tさんが安宅町の方であることを紹介すると、同じ町内の子どもたちから歓声が上がった。こんな素晴らしいことを成し遂げた方が、自分の身近にいるという誇らしい気持ちから出た歓声であろう。自分たちのふるさとに実在している方を誇りに思い、その方に出会い、生き方に直にふれることができる。このことこそが地域教材の大きな魅力であろう。

本実践を通して、当時の安宅小学校研究主題「人のつながり 心のつながり」こそが、道德の授業の根底に流れるものであることを実感した。こうした学習活動の積み重ねが、子どもたちにとって、これからの人生を支える指針の一つとなることを願っている。

# 体験を生かして

～道徳資料をきっかけに、自分たちの町のよさを見直す～

千葉県習志野市立谷津南小学校教諭 松田 憲子

## 住宅街での「郷土愛」の指導は

「郷土愛」の指導を皆さんはどのようにしているだろうか。歴史・伝統・自然がある地域では、きっかけとなる体験が比較的しやすい。しかし、「平凡な住宅街で……」と思う方には、「わたしたちの町って」(光文書院5年)はおすすめ資料だ。

あらすじを紹介する。ごく一般的な住宅地に住む主人公は、自分たちの町を「地味でふつう」と感じていたが、町を調べ始めると、意外にも漫画家やボクシングのチャンピオンなどが住んでいることを知り驚く。さらに町づくりに努力した人から、町がみんなの協力で長い年月をかけて作られたものだと知り、「地味でふつうの町」にしだいに愛着を持つという話である。

本実践は、資料を基に自分の住む地域について見直し、調べ学習へと発展させ、体験を通して、さらに自分たちも地域活動に参加することを通して、地域への思いを深めた実践(\*)である。

## 実践の全体と児童の意識の流れ「香澄の町の宝物」

### ①道徳「わたしたちの町って」

・資料をきっかけに、自分たちの町について互いに情報を交換し合い、今まで知らなかった町のよさに気づき、もっと知りたいという気持ちをもつことができた。「なかなか楽しいなあ」

### ②総合的な学習「香澄の宝を探そう～人物編」

・地域の宝物を探す中で、有名人を誇りに思うとともに「給食サービス」など地域を支える人々の存在にも気づいた。「足元に宝が！」

### ③道徳「給食サービス」

・地域のお年寄りために給食を届ける活動している人の思いや願いを知り、自分たちも地域に関わっていこうという気持ちをもつことができた。「すごいな。私たちにできることは？」

### ④総合的な学習「ぼくたちも香澄の宝に！」

・自分たちも毎月の給食サービスのお弁当に手紙を添えるボランティア活動をした。「かわりの一歩だね」

### ⑤総合的な学習「香澄の町の宝物」

・全体を振り返る。人々の支え合いによって成り立つ町に気づき、自分もその一員であるという自覚が強くなった。「人々が宝だ！」

## 実践を振り返って

資料は、子どもたちが意識しにくい人物や地域の人の思いに焦点をあてており、子どもたちの思考が無理なく地域の人物や行事へと向けられた。

これをきっかけにした調べ活動では、地域にサッカー選手など多くの有名な人がいることに驚き、インタビューに行ったり手紙を書いたりするなど予想以上に積極的な活動が見られた。

しかし有名人だけでなく、地域のボランティア活動(給食サービス)に目を向けさせたことが、「すごいなあ、香澄の町って」と、もう一歩思いを深めさせた。さらに、自分たちにもできる活動を探し、給食サービスに「お年寄りへの手紙」を添える活動をした。それがお年寄りからも返事にくるなど地域との交流にもつながったのである。

振り返りには次のような感想があった。

「有名な人もボランティアの人もどちらも大切な香澄の宝物。自分も人に喜んでもらえてとてもうれしかった。これからもできることがあったらかわっていききたい」

道徳資料をきっかけに地域の見直しをし、体験活動へと発展する中で、子どもたちは地域の一員としての自覚と愛着を深めていったのである。住宅街でも郷土愛は育てることができる。

(\*)習志野市立香澄小学校在籍時の実践

# 「人間関係づくりの演習と道徳③」

## ～「クラスがまとまる 支え合う」人間関係づくりを～

千葉県市原市立白金小学校校長 土田 雄一

年度の後半は友達同士の間関係づくりだけでなく、クラス全体のまとまり、高め合う力を育てたいものである。ここでは、学級全体の人間関係づくりに役立つ演習を紹介し、演習と道徳授業との関連について述べる。

### 「ばちばちリレー」で協力を実感

まず、クラス全員で円になる。スタートの人を決め、順番に手をたたく。「全員がたたき終わるまでに何秒かかるか」という演習である。学年や人数によってもタイムの違いはあるが、1回目のタイムより練習を重ねたり、話し合いをしてやり方を工夫したりすると確実にタイムは縮む。全員の協力によってタイムが縮む。協力による成果を実感しやすく、一体感がうまれやすい演習である。

左回り、右回りと回す方向を変えるのもよい。

### 「シットイングビーチボールバレー」と「合い言葉はナイスとドンマイ」

グループごとの活動で好評なのが「シットイングビーチバレーボール」である。意外に楽しい。

5～6人のグループで円になってお尻を床につけて座る。ビーチボールを使い、「時間内に、落とさずに何回トスを続けることができるか」を競う演習である。お尻を床につけたまま行うバレーボールである。時間は2分。1回目の記録を残しておき、それを超える回数をめざしてチャレンジさせるとよい。

ボールがビーチボールを使用するので、コントロールしやすく、安全であり、運動が苦手な子でも比較的取り組みやすい。慣れてくると100回を超えるグループもでてくる。作戦タイムを設け、どうしたら時間内にたくさんの数を回すことができるか話し合うのがポイント。

よいプレーには「ナイス」、失敗したら「ドンマイ」を合い言葉にすると温かい雰囲気が生まれ、

自然に協力し合う意識が高まりやすい。

ビーチボールは100円ショップなどで安価で手に入る。大きさの異なるものを用意しておき、交換しながら演習を進めるのも楽しい。

### 「協力ゲーム」を活かすために

まず、「タイムを縮める」「回数を増やす」など目標の達成に向かって話し合う「作戦タイム」を設けることがポイントである。(その際、前回掲載の「いな運送」で聞くとよい。)その作戦がうまくいくこともあれば失敗することもある。あるいは個人のミスによる失敗もあるだろう。そこでお互いに「補い合う気持ち」で作戦を立て直したり、並び方を工夫させたりするとよい。

次に「シェアリング」(ふりかえり・分かち合い)をすることである。協力ゲームを楽しむだけでなく、「協力できたか」「友達に声かけができたか」「どう感じたか」など簡単でもよいので話し合う時間を設けることがポイントである。

### 「支え合う仲間」(重点主題)と関連させる

5年の重点主題に「支え合う仲間」がある。「まかせてみようよ」と「みんなの劇」(『ゆたかな心』5年9・10)で構成されている。宿泊学習などと関連させて活用するのもよいが、ここで紹介したグループで行う演習と関連させて授業をするのもよい。

グループ・クラス全体での演習はいつもうまくいくものではない。その中でお互いを支え合い、高め合う気持ちや態度が実感しやすくなる。演習と道徳資料を組み合わせることによってよりねらいにせまりやすくなる。

「支え合う仲間」「協力」などねらいが共通であれば、他学年の資料でも活用できる。

# 授業参観におすすめの道徳授業

～低学年は『生命尊重』で感動を!!～

岐阜大学教育学部附属小学校教諭 竹井 秀文

## 1 生命尊重と資料「一まいのしゃしん」

低学年の子どもたちは、元気いっぱいパワフルである。目をキラキラさせて全力で生きている姿をみると、「生きる力」を感じずにはいられない。気がつく自分の「生きる力」も奮い立たされているのである。このような思いを、保護者にも味わってほしい。共感してほしいいつも思う。

さらに「生きる力」の源である生命について感じ取らせる授業は、低学年ほどいきいきする。それは、生命について普段感じていることを、感じたまに発言することができるからである。低学年だからこそ『生命尊重』という内容項目でも、いきいきとした授業が展開できるのである。

そんな低学年での授業参観におすすめの資料は『一まいのしゃしん』だ。

この資料のあらすじは、以下の通りである。

母が忘れられない思い出として大切にしている一枚の写真。それは、頭に包帯を巻いている母が、赤ちゃんの頃のたかしをだっこしている写真である。(母もたかしも笑顔の写真である。)

たかしがうまれて間もないころ、高熱を出して病院につれていこうとあわてていた母は、柱に頭をぶつけてしまう。気を失っていた母は、たかしの大きな泣き声で気を取り戻す。たかしを心配した母は、心臓に耳を当てて音を確かめて安心をする。

その後、お医者さんに「人はみんな生きる力を持っている」と話を聞く。そんな回想をして、成長したたかしに「たかしが、元気なのは、きっと生きる力があるからよ。」と語りかけて、たかしを見つめる。

生命は尊い。尊いとは、そのものが高い価値をもっており、他と容易にとりかえることができないものをいう。生命の尊さを考えたとき、まずは次の3点が挙げられる。

- ①生命は、かけがえのないもの。(命の唯一性)
- ②生命は、祖父母・父母・自分と受け継がれてきたもの。(命の連続性)

③生命は、自分だけのものではなく、家族を構成する大切なもの。(命の社会性・関係性)

以上のような生命の尊さを、感じ取ることが大切である。感じ取るとは、見たり聞いたりするという感覚によって知ったり判断したりするはたらしきである。つまり、生命の尊さを味わった経験を通して、「生きる力」とは何かを知り、自分の生命についての考えを深めていくことである。生命の尊さを体全体で感じ取り、自分のもっているたくましく生きようとする生命力を輝かせて生きるために、精一杯の努力を始めるようでありたい。

冒頭述べたように、低学年の子どもたちは、ふだんから精一杯全力で生きている。これは、自分の生命を精一杯輝かせている姿である。このような姿をすばらしいことだと自覚することが今回の大きなねらいであり、生きている感動を教室にいるすべての人(子・親・教師)が実感できるようにしたい。

## 2 指導案について

主題名「いのちきらきら」として、ねらい、展開は以下のようにして、授業参観に臨んだ。

一まいのしゃしん	3-(1) 生命尊重
----------	------------

(1) 主題のねらい

- ◎生命の尊さを体全体で感じ取り、生命あるものすべてを大切にしようとする。
- \*自分の命は多くの人たちによって大切にされ、支えられていることがわかる。
- \*自分や他人の命はかけがえのないものであり、自分にもそれを大切にしようとする心があることに気づく。
- \*自分ももっているたくましい生命力を輝かせようとする意欲をもつ。

(2)展開 (例)

主な学習活動	指導の方法	子どもの心と力の高まり
<p>①「いのち」とは何かについて話し合う。</p> <p>②資料『一まいのしゃしんから』を読んだ感想を話し合う ・「一まいのしゃしん」を見て、何を感じたのか話し合う。</p> <p>③別の「一まいのしゃしん」から、どのような関係性が見えるか意見を出し合う。</p> <p>④キーワードをもとに自分の考えをまとめる。</p> <p>⑤自分の家にも「一まいのしゃしん」がないか考え、これからの生き方を提言する。</p>	<p>●「いのち」と聞かれて思いつくことを自由に発言させる。</p> <p>●「いのち」はどうして生きる力の源なのか考えさせる。</p> <p>●生きる力とは、何かという問いをもたせて資料に入る。</p> <p>●「一まいのしゃしん」から、生命のたくましさや生きる力のすばらしさをとらえさせたい。 〈発問〉この写真は、どんな意味があるのだろう。</p> <p>●自分一人で生きているのではなく、家族に支えられて生きていることを感じとらせる。</p> <p>●自分にも生きるというたくましい力があることを感じとらせる。</p> <p>●「思ってくれる人がいるから」「いのちがあるから」というキーワードをつくらせる。</p> <p>●上記2点のキーワードを観点に、自分の考えをまとめて、話し合う。</p> <p>●キーワードをもとに「生きる力」について、一人ひとりに考えさせる。</p> <p>●自分の家にも「一まいのしゃしん」と同じように大切なものがないか考え、これから自分がどのように生きていくのか意欲をもたせる。</p>	<p>○大切ないのち。</p> <p>○たった一つのいのち。</p> <p>○いのちがあるから生きられる。</p> <p>○生きる力ってなんだろう。</p> <p>○生きる力を感じる写真。</p> <p>○母親ががんばっている写真。</p> <p>○生きる力があることを教えてくれる写真。</p> <p>○生きることのすばらしさを教えてくれる写真。</p> <p>○家族の宝物の写真。</p> <p>○家族に支えられて生きていることが分かる写真。</p> <p>○自分にも、たくましい力があることがわかる写真。</p> <p>○思ってくれる人がいるから、のびのびできる。</p> <p>○いのちがあるからがんばれる。</p> <p>○いのちがあるから笑顔になれる。</p> <p>○家族などの多くの人に支えられて生きているのだな。</p> <p>○自分だけのいのちではないな。</p> <p>○生きる力って、自分も持っているいちばん大切な力だ。</p> <p>○いのちは、つながっているから、みんなの中でしっかりと生きていきたい。</p> <p>○自分がかがやかせて生きていきたい。</p> <p>○これからも元気いっぱい生きていくぞ。</p>
<p>発 展</p>	<p>・各家庭に事前に授業の趣旨を連絡しておき、それぞれにおける「一まいのしゃしん」を準備してもらう。また、そのときのエピソードや体験談を語ってもらえるようにしておく。道徳ノートなどをもって帰らせて、家庭でも「生命」について話し合えるようにする。(授業参観の場合は授業中に上記の活動を仕組んでもよい。)</p>	

### 3 指導の実際

- T: (「いのち」と板書して) いのちって、なあに。  
 C: はい。(ほとんどの子が元よく挙手する)  
 T: みんなすごいね。(席順で発表させる)  
 C: 大事ないのち。  
 C: いのちは心。心って愛情。  
 C: ひとりにひとつのいのち。  
 C: せかいにたったひとつのいのち。  
 C: 自分のいのち。みんなのいのち。  
 C: いのちは、まもる。  
 C: 動物や植物のいのち。  
 C: ひろがっていくいのち。つづいているいのち。  
 C: 成長するいのち。そだっていくいのち。  
 C: 美しいいのち。きれいないのち。  
 C: まぶしいいのち、かがやくいのち。きらきら。  
 C: いのちにふれる。いのちは大切。  
 C: いのちの「い」は、いきいき。  
 C: いのちの「の」は、のびのび。  
 C: いのちの「ち」は、力。ちからいっぱい。  
 C: いのちの「い」は、いきている。  
 C: あ〜わかった、いのちって、いきいき、のびのび、ちからいっぱい、いきているだ。  
 C: お〜そうだ。そうだ。(口ぐちに発する)  
 ※ここまでの発言は、簡単にまとめたが、この時点で学級のほとんどの子が発言している。  
 T: みんなすごいね。びっくりした。もう十分だよ。学ぶことないよ。終わりましょう。  
 C: え〜。授業参観なのに、いいの。  
 T: そうだね。困ったな。何を考えよう。



- C: 先生、時間がたっぷりあるから、資料を使おうよ。資料あるでしょ。(教室中笑い、教師苦笑い)

T: あるよ。(資料『一まいのしゃしん』を配布した後)に範読する)

※資料に感動した様子で、しばらく教室が静まる。

- T: どう、何か考えることある。  
 C: 先生、生きる力ってすごいね。  
 C: 生きる力って、なんだろう。  
 T: この写真は、どんな意味があるのかな。  
 C: 写真を見るだけで、いのちは大切だよと教えてくれるものだと思う。  
 C: 生きることが当たり前だとは思えない写真。  
 C: そうそう。だから大切な宝物なんだよ。  
 T: みんなは当たり前のように生きているの。  
 C: 今まであまり考えなかったけど、生きるってすごいことだよな。  
 C: しっかりまもりたい。  
 T: どうしてそう思えるの。  
 C: 自分のいのちだもん。自分のいのちは自分でまもりたい。  
 C: 自分のいのちは、親からももらった大切なものだから。  
 C: 家族や大切にしてくれる人がいるから。  
 C: いっぱいいるね。兄弟やおじいちゃんおばあちゃん。家族のみんな。友だち。近所の人。(心を動かせる写真をたくさん掲示する)  
 T: たくさんの方がみんなのいのちを思っているね。だから、みんないつも元気なんだ。(「思っている人がいるから」と板書する)  
 C: 写真を見て思ったけど、赤ちゃんがきれいにかがやいている。  
 C: 新しいいのちが光っているよね。  
 C: 小さくても、いきいき生きてる。  
 C: いのちがあるってすごい。



C：いきいきしてる。いのちの「い」だ。  
 C：のびのび生きている。いのちの「の」だ。  
 C：力いっぱい生きている。いのちの「ち」だ。



T：（「いのちがあるから」と板書して）どう思う。  
 C：いのちがあるから、がんばれる。  
 C：いのちがあるから、あたたかい。  
 C：いのちがあるから、愛がある。（みんな笑う）

道徳プリントに自分の考えをまとめて、数人に発表してもらう。その後、家庭へ持ち帰って『一まいの しゃしん』を選んでもらうように保護者へお願いして授業を終わる。こうして授業参観が終わっても、授業は続くのである。次の週に、完成した道徳プリントを教室に掲示した。

いのちがあるから  
 いきいきしている。  
 ちからいっぱい  
 たくましい。

この赤ちゃんは、どうも元気な様子です。目をぱっちり開いて、口もぱくぱくしています。お母さん、お父さん、みんな笑顔で見ています。かっこいいですね。

いのちがあるから  
 楽しいんだ!!  
 かいばれんぞ  
 たんまじやほ  
 ちやかやける。

あなたがこんなだと思わなかったのですね。うれしかったです。  
 ・思いがけぬくらいいきいきしているよ。

いのちがあるから  
 いのちがあるから  
 うれしくなれる。

この赤ちゃんは、どうも元気な様子です。目をぱっちり開いて、口もぱくぱくしています。お母さん、お父さん、みんな笑顔で見ています。かっこいいですね。

いのちがあるから  
 いきいき  
 きつかな  
 元気だ。

かっこいいですね。みんな笑顔で見ています。かっこいいですね。

#### 4 保護者の感想

授業参観において、子どもたちが生命について真剣に話し合う姿を見せることができれば、保護者の心も大きく揺さぶられる。学級全体になんともいえない温かい雰囲気があふれる道徳の授業（授業参観）は、意義深い。

保護者から次のような感想をいただいた。

授業参観ありがとうございました。早速、娘にも超音波写真、退院の時、兄と姉のうれしそうなお笑顔の温かい写真など思い出の数々を見せてあげました。姉は、弟が生まれるとき、陣痛から出産までを見学させました。それは、母として女の子を育てる時、やがて母となる娘に「赤ちゃんがうまれる」とは、どんなに大変で意義のあることかを感じてほしかったからです。娘もたくさんの思い出の数々を見て、自分が家族の一員であり、どんなにみんなに愛されているかなど親子のつながりを実感し、いのちの尊さを感じてくれたことと思います。きっと自分を大切にしてくれるでしょう。

子どもを授かってから、今までの成長を私自身が振り返ることができ、今こうして元気いっぱい子どもが、学校に通っていることを本当にうれしいことであると思いました。我が家でも子どもがうまれたときのビデオを父と母と本人で見ました。今まで忙しくていて、そのビデオのことすら忘れていたので、この機会にと思い、一緒に見ました。母の私は、くたびれ果てて不機嫌そうに写っており、父親は、それはそれはうれしそうに写っておりました。ビデオに写っていなかった「兄も姉もあなたの誕生をとっても楽しみにしていて、とてもかわいがっていたんだよ。」という話をしました。本人がこの学習をきっかけに自分を大切にしながら命のリレーが続いてくれたらということをお願いしています。

家に帰る途中から、「私が生まれてきたときうれしかった? どう思った?」「弟が生まれたときもそうだったの?」と誕生してきたときの親をはじめとする周囲の喜びなどを言葉として確認しようとする娘の様子が見られて、自分の存在価値などを改めて感じていたようでした。授業中も、子どもと一緒に私自身も出産時を思い出し、なんとも言いがたい、ただただ「いとおいしい」気持ちがこみ上げてきました。今は、「親」として日々がんばっているのですが、自分の親からみれば私は、「子ども」で、私の親もやはり同じ思いで私を生み育ててくれていたんだと思うと、また別の感謝の気持ちでいっぱいになりました。

子どもを温かく包みこむ道徳の授業は、親の心に響く。それは、生きる喜びを味わい、希望を与える授業だからである。そんな授業は、親子の心のつながりを自然に再確認できる。こんな嬉しい事はない。

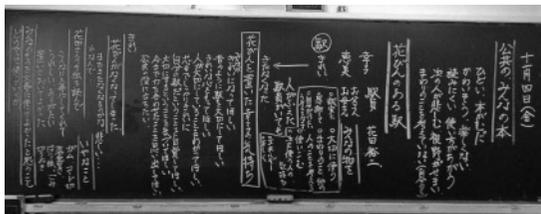
授業参観における道徳の授業は、子どもと保護者が人間のよさに触れる貴重な時間と空間をつくりだすことができるのである。授業参観こそ、やっぱり道徳の授業を!!

# 板書の工夫

筑波大学附属小学校教諭 加藤 宣行

## 1. 一般的な板書

一般的という表現があてはまるかどうかはわかりませんが、普通先生方がイメージされる道德の板書は下の写真のようなものではないでしょうか。この板書の授業は、最近私が自分の学級で行ったときのものです。



特徴としては、

- ・右から左へストーリーを追うように書かれている。
- ・登場人物の心情をたどりながら、資料の内容把握ができるようになっている。
- ・子どもの発言をなるべくそのまま書き写すようにしている。

そして、この写真にはありませんが、場面絵やあらかじめ教師の発問を書いた短冊などが貼られることも多いと思います。

さて、この時の子どもたちの反応はどうだったでしょうか。賛否両論ありました。

<よかった点>

- ・黒板がぎっしりつまっていて、達成感があった。
- ・意見が言いやすかった。
- ・道德ノートの書き方が簡単で書きやすい。

<よくなかった点>

- ・文章で書いていたから写すのが疲れた。
- ・図がなかったから、あまり頭が整理されなかった気がする。
- ・事実を言うだけで黒板がうまるけど、深まっている気がしない。

ここまで読んだ方はお気づきだと思いますが、私の通常の板書(授業)は、このスタイルをとっていません。どのような点を工夫しているかという点、

- ・黒板の真ん中にテーマを掲げる。
- ・図や表を使って、ねらいに迫る考えを述べ合うステージとしている。
- ・子どもが板書に参加するようにしている。



- ・図や表が描きやすいように、横書きスタイルをとっている。

などの特徴があります。

## 2. 工夫の観点

(1) 黒板の真ん中にテーマを掲げる。

本時のテーマは何なのかを常に意識しながら資料を読んだり、話し合いに参加したりできるようにするためです。もちろん、テーマは子どもたちが抱える問題意識を反映するようにします。時には子どもたちと一っしょに授業を通して問題設定をし直すことがあってもよいでしょう。

(2) 図や表を使う。

子どもたちは、何とか自分の考えを相手に伝えようとするときに、言葉だけでなく図や絵や記号を使うことが多いようです。実際、私自身も、ものを考えるとき、同じようにします。そうすることによって頭の中のいろいろな要素が整理され、つながってくるのです。

(3) 子どもが板書に参加する。

「先生、黒板に出て説明してもいいですか」授業中にこうやってきた子ども(Y君)がいます。う

まく言えない、伝えられないもどかしさに、Y君は思わず席を立ったのでしょ。考えてみると、他教科では子どもが黒板に出て作業をしたり、答えを書いたりすることは当たり前のように行われていること。ところが、道徳ではあまり見かけません。なぜでしょうか。道徳教育に子どもたちの自由な発想が入り込む余地はないという考えがあるとしたら、その時点で道徳教育は子どもたちの意識から遠く離れた、人ごとの世界（学習）になってしまいそうです。

### 3. 板書の実際

(1) 黒板の真ん中にテーマを掲げる。



黒板の中央に本時のねらいにつながる「問い」を書きます。その問いに向かって子どもたちが話し合いを通して自分の考えを練り広げていくステージとして黒板を使うのです。そのためには、全体を俯瞰できるようにしなくてはなりません。例えば、はじめに○○君がこう言って、それを受けて□□さんがこれに気づき、このような結論に至ったということが、黒板を見れば想起できるということです。

(2) 図や表を使う。



資料を通して本質に迫るとき、あらすじや登場人物の気持ちを追うだけではみえてこないものがあります。図や表を使いながら分析することで、みえないものがみえてくることあるのです。「ああ、資料には書いていないけれど、こういう人もいるよね」とか、「きっとこの人はこんな気持ちだったんだよ、だってほくもこの前、同じようなことがあったからよくわかる」などというように、『ねらいから離れずに資料から離れる』手

助けにもなります。

(3) 子どもが板書に参加する。

この写真は、子どもたちが書いたワークシートを黒板に貼り、考えているところです。このような黒板を見て、子どもたちは実感を深めます。



### 4. 子どもたちの感想

はじめの授業に話を戻しましょう。授業後の感想に、子どもたちはこんなことを書いてきました。

今回の授業は、考えやすかったけど、深い意見は少なかったかもしれない。黒板の書き方は、今までのように図でかいた方が自分の考えも足しやすいし、考えが広がると思う。生徒も先生も頑張って、ひとつの授業をつくっていききたいな、と思った。

今回の授業は発言しやすかった。浅く広い授業だった。いつもはせまく深い。私的にはいつもの授業の方が好き。ノートに写しやすいのは今回の方だけど、やっぱり深く考えたい。

どちらの授業にもメリット、デメリットがあります。要は、子どもの実態や状況に合わせて、いかに使い分けるかということでしょう。授業の意図が変われば板書が変わりますが、逆に、板書を変えることで授業が変わってくる、別のスタイルがみえてくるということもありそうです。